



各部会を開催しました



1月31日（水）に令和5年度、各部最終部会を開催しました。

体育部・文化部・福祉部・地域づくり部・自治振興部 部会毎に事業計画の実施状況や今年度の反省点等も含めて次年度の事業計画案を作成しました。これを次年度に引き継ぎし、新年度の委員で作成して行きます。

殆どの事業がコロナの第5類移行によって実施することができました。天候によりやむを得ず中止した事業もありましたが計画通り実施できましたことは大変よかったです。

来年度には少し事業内容の見直しがあるようですが具体的には来年度の総会で決定されます。

反省点も多々ありますが、皆さまの協力がなければ事業は実施できません。今年度計画の事業で、まだ実施していない事業もありますので、募集時にはぜひ参加をお願いします。

‘そうあんの里 落語会’開催案内チラシを別途配布します。

また、自治協議会の事業実施にはボランティアの方の協力が欠かせません。ボランティア活動に興味のある方はぜひ参加してみてください。一緒に活動しましょう。

問い合わせは宿南地区自治協議会事務局へ 電話/fax でお願ひします。(662-3400)



クイズ 自治協からのメッセージを探そう

広報紙‘ふるさと宿南’第141号（令和5年4月）～第150号（令和6年1月）に「隠し文字」が印刷されていましたがお気づきでしょうか。間違いでも、印刷トラブルでもありません。

今からでももう一度、各紙面を探してみてください。一紙に1文字が隠れています。（全部で10文字）

その文字を並べ替えると自治協議会からの「メッセージ」となります。

来月号で応募の詳細は発表します。豪華（？）景品をゲットして下さい。

※ヒント「今月号よりそうあんくんのイラストが元に戻りました。」

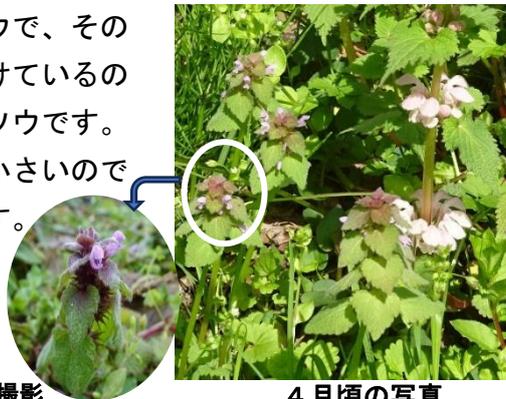


身近で見られる植物 ③③

ヒメオドリコソウ（姫踊子草）〈シソ科〉

雪解けの畑には越冬雑草がいっぱい生えています。

その中の一つのヒメオドリコソウは、本来なら4月ごろに地面一面に広がっている草ですが、今の時期でも花を咲かせていました。写真右の白い大きな花をつけているのがオドリコソウで、その隣に小さい花をつけているのが、ヒメオドリコソウです。オドリコソウより小さいのでヒメとついています。なぜ踊子草と言われるのか調べてみて下さいね。



R6年2月撮影

4月頃の写真

喫茶 ひまわり より

皆様いかがお過ごしですか？

2月と言えば **バレンタイン** ♡
少し遅れますが

19日(月)・22日(木)に
お楽しみデーを企画しています。
お散歩がてら是非お越し下さい。
お待ちしております。



お知らせ
2月19日(月) 22日(木) 喫茶ひまわり バレンタインデー
2月24日(土) 第18回ボウリング大会
3月10日(日) そうあんの里 落語会(チラシ配布) 日曜カフェ オープン 9時~12時



草庵先生紹介

日記 60



浪華(大阪)の泊園書院で医学を志して勉学する長兄の池田子定(中央)

宮崎和夫さん作

池田草庵に下野国(栃木県)の宇都宮藩から、藩主の指導者として来てくれないかという招きがあったことがある。このことを草庵が誰かに相談した、というような記述は日記にはない。招きの手紙が届いた日には、次のように書かれている。

「宇都宮藩の岡田氏から手紙が来る。妻八鹿より帰る。夜、片山(実家・長兄の家)に行く。しばらくして帰る」(嘉永5<1852>年9月26日)

草庵は招きの手紙を受け取り、その後実家に行っただけである。この3日後には断りの返事を手紙に書いた。実家に行ったのは相談というより、自分の決心を長兄の子定に報告に行ったのだろう。草庵の進む道についてはいつでも理解し、援助していた子定である。この時も、草庵の決心を理解し、応援したことだろう。しかし、子定の胸中は複雑なものがあつたかもしれない。子定自身は若いころ学問で身をたてるために、ふるさとを離れていたことがあつたのだ。

「草庵の長兄子定は早くから医師になることを志し5年間も大阪に出て修行中、相馬九方の学友である藤沢東暎の塾に寄寓し古文辞学について、相当深い教養を身につけていた」(池田草庵先生日記『山窓功課下巻』西村英一)子定は、医師になる志をもって大阪で儒学の塾に入って勉学していた。子定の勉強ぶりは「渦潮の譜一岸和田藩儒・相馬九方と幕末の学者群像」(梅谷卓司著)の中で、「池田子定は、将来は医者^{けんしん}を志し、いま藤沢東暎の泊園書院で儒学の研鑽に励んでいる秀才」と紹介されている。しかし、子定の場合、両親の強い反対にあい、志半ばでふるさとに帰ったのである。子定にはこのような経験があつたから、草庵が自分の信じる道に進むのを側面から応援し続けたのであろう。なお、子定が学んでいた同じ塾の先輩に相馬九方がいた。この縁で九方を但馬の広谷(養父市広谷)に招くことができ、お寺の小僧であつた草庵の新しい道を開くことになったのである。

池田草庵先生に学ぶ会